

## 摘録断腸亭日乗 上・下

永井荷風著 磯田光一編 岩波書店 1987  
(岩波文庫)

法学部教授 高橋 勇夫

学生に限った話ではないが、「世間」に対してどういうスタンスで向き合うか(あるいは向き合わないか)という問題は、けっこう悩ましい。「就活」で駆けずり回るようになると世間に触れたような気がするそうだが、それでは遅すぎるかもしれない。自分を認めてもらおうとするだけでは、たとえ就活に成功しても、いずれ「世間」に呑み込まれてしまうだろう。

戦争、政治家、文壇、新聞記者、ラヂオ、威張るやつ、……、荷風はほとんどあらゆるものに腹を立て続けたが、よくもあれだけ怒る相手がいたものだと、うらやましくも思う。しかも怒るのが抜群にうまい。批判には道理とロジックが必要だが、怒るのだって知識と技術が要るのである。頭に来たからといって闇雲に叫べばいいというものではない。

専大の学生たちは、概して、善良であることによって世間に認めてもらおうと考えているフシがある。批判すべきことは批判することをおぼえた方がいい。それもじつは、多分に技術なのである。ぜひとも『断腸亭日乗』を愛読して、怒るためのトレーニングを積んでほしい。



## われ笑う、ゆえにわれあり

土屋賢二著 文藝春秋 1997 (文春文庫)

法学部准教授 東 裕美

みなさんにお薦めしたい本ということで、この一冊が浮かんできた。哲学者が、哲学と私見をとりまぜて綴ったエッセイ集だ。

この本は、常識にとらわれない自由な発想を私たちに提示してくれる。また、私たちが普段何気なく使っていることばについても、考えさせてくれる。様々な語を定義することは非常に難しい。それにもかかわらず私たちはその語を用いてコミュニケーションをとるのに何ら支障はない。このことを様々な例を挙げながら示し、「ことば(の意味)を理解している」ということは、定義できるということであるとはかぎらない」ことを痛感させてくれる。ちりばめられた言葉遊びの面白さを体験することもできる。

…こんな風に真面目に書いているが、実は何度読んでも笑わずにはいられない、笑いを求めている人には必読の書。